０７／０９／０９　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　副牧師

主　　題：あなたの人生の色は　３
聖書箇所：詩篇　１６篇

ある１２月の寒い夜、降りしきる雪の中一人の少女が道端でマッチを売っていました。皆さんはこの物語をご存じでしょう？ハンス・クリスチャン・アンデルセンの書いた「マッチ売りの少女」です。この少女は道の傍らに裸足で座り、寒さと飢えの中で、また、孤独と悲しみの中で持っていたマッチを擦って暖をとっていました。マッチが灯っている間、彼女はそこに暖かさと幸福感を見出しました。喜び幸せを感じることができる様々な事柄を想像していた訳です。皆さんよくご存じですね？皆さんは今、彼女の姿を想像することができるのではないかと思います。もしかすると皆さんは、少女の代わりに自分自身をその凍える１２月のある町の道端に見出すかもしれません。もしかすると皆さんは、彼女のように彼女が置かれていた状況を自分自身の前に持ち、彼女と同じような感情を抱きつつ生きたことがあるかもしれません。もしかすると皆さんも、彼女と同じようにマッチを擦りながら、これさえあれば私は喜ぶことができるのに、これがあれば幸せになれるのにと、そのように思うことがあったかもしれません。もしかすると皆さんは、今も心の中でもし私がこれを持っていたらと叫び続けているのかもしれません。私たちにとって満足に満ちた人生を送ることは、東が西と交わることがないように、現実には自分とは関わりのないものであると考えているのかもしれません。

けれども、ダビデは「私は満足を持っている」と宣言しました。彼は自分の人生がうまくいっている時に「私は満足を見出しています」と言ったのではなく、「たとえ、私が抱えている困難が私を打ち負かすことがあったとしても私は満足を持っています」とそう言ったのです。いったい、どうしてダビデはそのように言うことができたのでしょう？どうして、ダビデは自分のいのちさえ危ぶまれるような状況の中にあっても喜びと満足を自らのいのちの中に見出したのでしょう？私たちはダビデと同じ様な喜びと満足に満ちて生きることができるのでしょうか？私たちのあらゆる事柄がうまく行かず、私たちが願っている物を何一つ手に入れることなく、唯一できることは、ただポケットの中にあるマッチを擦り続けることしかない、その様な状況の中でダビデと同じように「私は満ち足りています」と言うことができるでしょうか？今朝、皆さんといっしょにそのことを考えて行きたいと思います。私たちはすでに詩篇１６篇を学んで来ました。ダビデはそこでどうすればそのような生き方ができるのかを教えてくれました。ダビデはこの様に歌っています。

16:1 神よ。私をお守りください。私は、あなたに身を避けます。
16:2 私は、主に申し上げました。「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません。」
16:3 地にある聖徒たちには威厳があり、私の喜びはすべて、彼らの中にあります。
16:4 ほかの神へ走った者の痛みは増し加わりましょう。私は、彼らの注ぐ血の酒を注がず、その名を口に唱えません。
16:5 主は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。
16:6 測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。
16:7 私は助言を下さった主をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える。
16:8 私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。
16:9 それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。
16:10 まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。
16:11 あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

ダビデはこの詩篇を通して私たちにいくつかの事柄を教えています。敬虔な人物、神の前に喜ばれる敬虔な者とはどのような人物であるのかをダビデはこの詩篇を通して私たちに明確に示してくれたのです。ダビデが人生の問題に直面した時、そこには来るかもしれなかった死が含まれています。そのような問題に直面した時、ダビデは神の前に「助けてください、お守りください」と言ってこの詩篇を書き始めました。その祈りから始まって、ダビデはまず最初に私たちに敬虔な人物がどの様な特徴をもっているのかを教えてくれました。その５つの特徴が最初の４節に書かれています。（１）主に信頼し、（２）主の主権のもとに生き、（３）神だけが幸いの源であるということをしっかり知って生きる、（４）神を愛する聖徒たちとの交わりを何よりも喜び楽しみ、（５）偶像礼拝者たちの悪を忌み嫌う者でした。そして、ダビデは次の４節を通して敬虔な人物がもっている神に対する確信を教えてくれました。なぜ、

神に対して確信をもつのでしょう？いったい、どのような確信をもつのでしょう？それに関してダビデはこのように言いました。（１）神が必ずダビデの人生に報いてくださることを彼が知っていたから、そして、そのような報いが与えられるのは、（２）神との正しい関係が存在することをダビデは良く分かっていたから、それ故に神に確信をもっていたのです。（３）ダビデは神のみことばに信頼していました。だから、自分の感情がどのようなことを叫ぼうとも、自分の置かれている状況がどのようであっても、神のみことばが正しいことを知っていた故に、彼はそれをもって人生を生きて行こうとしたのです。そして、（４）ダビデは神に受け入れられることを知っていました。それが彼の確信でした。それが、彼の持っていた揺るぐことのない神にある保証だったのです。

そのことを語った後、ダビデはいよいよこの詩篇をまとめて行きます。９節にある**「それゆえ」**ということばをもって、ダビデはこの詩篇のクライマックスを記して行こうとするのです。たとえ、どのような困難な状況の中にあったとしても、神は神の民に対して満足に満ちた人生を恵みの内に必ず備えてくださるということをダビデはここで教えてくれています。敬虔な人物の色は何色ですか？その質問を何回か続けてして来ました。その色は「満足」という色でした。私たちはこのダビデの最後のことばを見て行くに当たって、どうしてこのような喜び、このような満足が私たちにあるのかを考えて行きたいと思います。そして、そのことを通して、神の恵みによって、私たち一人一人がダビデに見習う者となって行きたいと願います。どのような状況の中にあっても、私たちが自分の人生において「私は満足している、私は喜んでいる」と言うことができるように。

☆どうしてダビデはこのような満足をもっていたのか？

１．聖書的な喜びをもっていたから

９節**「それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。」**と敬虔な人物は満足をもっているが、その理由の第一番目は、その人は聖書的な喜びをもっているからです。聖書的な喜びを持っている故に、敬虔な人物は満足しているのです。この喜びというのは決して感情的な喜びではありません。また、状況によって変化するような喜びでもありません。ダビデがこの詩篇を書いた時の状況を考えた時、感情的にはあまり喜ぶことができない困難な状況でした。でも、その中にあってダビデは「喜ぶ」と言うのです。この喜びというのは、感情や状況に支配されたものではなく「聖書的な喜び」です。この「聖書的な喜び」は神に信頼を置いている者だけがもつことができるすばらしい特権です。そして、神に信頼をもっている者はこの喜びに満たされて生きることができるのです。パウロはこの喜びについて、ピリピ４：４で**「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」**と言っています。私たちは先ほど歌いました。「いつも主にあって喜び歌おう。いつも主にあって喜び踊ろう。どんな境遇にあっても満ち足りることを知るために、十字架のイエスさまを見上げて、いつも主にあって喜ぼう。」と。皆さんはこれを歌っている時、どのような思いでこの歌詞を歌いましたか？以前、このピリピ人への手紙４章を皆さんとごいっしょに学びましたが、その時に「聖書的な喜び」とはこういうことですと定義しました。「喜びとは感情ではありません。喜びは信徒の最善のために、また、ご自身の栄光のために神があらゆる事柄を支配しておられるということ、そして、それ故にどの様な状況にあってもすべては万全であるという根底からの確信である。」と。喜びというのは感情ではありません。それは神が信徒の最善のためにあらゆることを為され、神ご自身の栄光のためにあらゆることを為さっておられる故に、どの様な状況にあっても神がそれを為しておられるから「私は万全です」と言うことができる、その確信なのです。

「聖書的な喜び」はこの世の事柄に支配されません。自分自身の感情に支配されるものではありません。「聖書的な喜び」というのは、私たちがもっている神に対する信仰、神に対する信頼、それにかかっているのです。この「聖書的喜び」をダビデはここで非常によく表わしてしています。**「それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。」**と。この「喜ぶ」と「楽しむ」ということばがいっしょに使われている箇所は、旧約聖書に２７回あります。その多くは、突然わき上がって来ることばに出す大きな喜びを表わします。先ほど歌った通り「主にあって喜び歌う」のです。「喜び踊る」のです。私の心、私のたましいがこのような喜びそのものであるとダビデは言います。これらの表現は簡単に言えば、彼自身のすべてがそれをしている、彼の全人格、全存在が喜び楽しんでいると言うのです。別な言い方をするなら、神の前に敬虔という特徴を備えた人物であるダビデ、神の前に完全な信頼、確信を得ているダビデは、この置かれている状況の中にあって、私の存在の中にあって喜んでいない部分は一つもありませんと、そのように言っているのです。私のすべては神を喜んでいる、与えられているこの人生を喜んでいると言います。しかし、このような喜びはダビデが置かれている現実の状況の中に見出すことはできませんでした。置かれている状況は決して好ましいものではなかったし、実際に彼は、ここで自分自身の死を思い描いているのです。

では、いったいどうしてダビデはそのような喜びを見出すことができたのでしょう？それが５－８節に書かれてありました。神の前にある確信、それは報いが与えられていることが分かる、神との関係がすばらしいものであることをダビデは知っていた、神のみことばが正しいことをダビデは知っていて、そして、神の前に受け入れられることをダビデは良く分かっていた、それがダビデの確信でした。そのような神だから、今置かれている状況の中にあって、彼は神に信頼を置き、それ故に喜びを失うことがなかったのです。事実、ダビデは言いました。２節の後半で**「私の幸いは、あなたのほかにはありません。」**と、彼は幸せだったのです。ダビデは満ち足りていたのです。なぜでしょう？状況が良かったのではありません。ダビデは神が自分の主であることを良く分かっていたからです。このような神の前にある確信の故に、神がどの様なお方であるかをよく分かっていた故に、得ることができていたその確信の故に、敬虔な人物はどの様な状況の中にあっても「私は喜ぶ」と言うのです。

そして９節の終わりに**「私の身もまた安らかに住まおう。」**とあり、万全です、恐れることはありません、不安になることもありません、私は完全に満ち足りていますと言います。ときに、人生は私たちが予測できないような問題を私たちの前に与えます。そして、サタンは私たちがこの生涯の今置かれているこの状況の中に、喜ぶ理由も楽しむ理由も何一つないと私たちが思うことを何よりも喜んでいます。人生の荒波は、ときに私たちが海の底に沈んでしまっているかのような感情を思い起こさせます。そして、私たちが二度と水の上に顔を出すことができないかのような絶望感を与えます。けれども、その様な状況の中にあってダビデは「神さまが私の右の座にいるから私は揺るぐことがない」と、そのように言ったのです。もしかすると皆さんも、人生の様々なチャレンジの中に今置かれているかもしれません。今そのような状況でない方もおられるでしょう。でも約束できることは、そのような状況がいつの日か必ずやって来るということです。けれども、その時、私たちは覚えておかなければなりません。神はいかにすばらしい方であるのか、いかに良い方であるのか、いかにこの神が完全な計画を私たちの上にもっておられるのかということです。皆さんはこの神こそが皆さんの巌であり砦であることを覚えておかなければなりません。この方はどの様な状況の中にあってもその力強い御手をもって皆さんを守ることができるのです。皆さんはこの神以外に幸いはどこにもないことをよく覚えておかなければならないのです。７節でダビデが宣言したように、皆さんは神の助言に教えられていないといけないのです。サタンが喜ぶことは何でしょう？皆さんが困難な状況の中で落胆し喜びを失ってしまって、私はここで喜ぶ理由は何一つ見つけることができないと言うことです。その時に皆さんは知っていることがあるはずです。この聖書が教えていること「私は主にあって喜ぶことができる」ということです。ここで、私たちが感じていることと、私たちが知っていることにはギャップがあります。そのとき皆さんは何をしますか？私の心はダビデがしたように私を教えるのです。正しいことを確信して生きて行くように。そうすることによって私たちは感情の叫びに打ち勝って行くことができるのです。

敬虔な人物は満足を覚えています。満足をもって生きて行くことができます。なぜなら、その人は「聖書的な喜び」を知っているからです。でも、それだけではありません。もしかすると皆さんはこの様に言われるかもしれません。確かに、私たちはこのような困難な状況の中で「喜びなさい、喜ぶことができるのですよ」と自分自身に言い聞かせてきました。一生懸命そのことを努力して来ました。「神さまどうぞ助けてください、あなたがしていることは最善だからどうぞ私を守ってください」と祈り続けてきました、でも、一向に私はこの困難な状況から解放されません、そんな状況に陥ったことはありませんか？そして、困難な状況が解決しない故に私たちは言うのです。「やっぱり、喜び楽しむ理由はどこにも見つからない。満足できない。」と。余りにもよくある罠です。余りにも私たちが人生の中で陥ってしまう罠です。それ故、私たちはそのような間違った考え方に勝利する術を学ばなければならないのです。そして、私たちはそれが確かに私たちの前に与えられていることを覚えておかなければならないのです。

２．最終的な勝利を得ているから

ダビデは言います。敬虔な人物が満足しているのは聖書的な喜びをもっているだけでなく、その人が最終的な勝利を手にしているからだと。ダビデはこれまで彼に安心が与えられていることを何度も告白してきました。一番初めに、彼は神の前に「神よ、私をお守りください」と祈りました。この「神」ということばは「エロヒム」ということばが使われていました。このことばは究極の神を表わすことばであり、神の存在を称えることばでした。他の神々ではなく、この方が圧倒的な神であり、その方に力があることを私たちはそこから見ることができたのです。全能の神と言っても過言ではないでしょう。その方が私を守ってくださるのです。なぜ、このような祈りをしたのでしょう？ダビデはこの方が全能の力を持って自分を守ってくださる巌であり砦であることが分かっていたからです。それ故にダビデは、８節で**「私はゆるぐことがない。」**と言ったのです。そして、９節で**「私の身もまた安らかに住まおう。」**と言いました。けれども、このようなことばは、彼が現在抱えている喜ばしくない、好ましくない状況

から彼が解放されることを期待して語ったことばではありませんでした。別な言い方をすれば、ダビデは、彼が喜び満足していたのは、神が私を守ってくださって、必ず、今置かれているいやな状況から解放してくださる、だから、そのように思うことができると言っているのではないのです。１０節には**「まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、…」**とあります。この**「よみ」**ということばは、ヘブル語では死者が集う場所を表わしています。神は私をこの死が迫っている危険な私にとって好ましくない状況から助けてくださるということではなくて、たとえ、私がその状況の故に死んだとしても、ということを言っているのです。**「よみに捨ておかず」**、ダビデは神は死から私を救ってくださるのではなく、この危険な状況から助けてくださるのではなくて、私を死の中に留めて置くことはない、たとえ、私が死者の集う場所に行ったとしても神は私をそこに置き去りにして見捨てることはありませんと言っているのです。私たちの多くは、困難な状況の中で私たちが神に助けてくださいと願う時に神は助けてくださると信じ込んでいます。つまり、その状況から解放してくださる、そのような困難を取り除いてくださると間違って信じている人たちがいます。けれども、ダビデはこの時そのようなことを確信していたのではなかったのです。彼は死に直面するような状況の中にあって、実際に自分が死を迎えることを考えていましたが、その時にあっても、彼の確信は揺るがなかったのです。なぜでしょう？その答えは単純です。ダビデは神の約束が真実であると信じていたからです。これはまるでダニエルの三人の友人たちのようです。人生の中でいのちを失うような危険の中にあって、ダビデはそこから逃れることができないかもしれないということがよく分かっていたけれど、同時に、ダビデがそれ以上によく分かっていたことは、彼の人生は、彼を決してよみに捨て置くことがない愛をもって彼に接してくださる、すばらしい力強い神の御手の中にあることを知っていたのです。

ダビデはさらに続けます、**「あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。」**と。ここで使われているこの**「聖徒」**ということばは、３節に使われている**「聖徒」**と全く同じ訳がされているのですが、実は原文では違うことばが使われています。３節では**「聖徒たち」**と複数形になっていますが、１０節に出てくる**「聖徒」**は単数形です。つまり、ここでダビデが言っていることは、神の聖なる人物に約束されていること、それは神の前に完全に聖い者には決して墓の穴を見せることがない、ということです。たくさんの聖徒のことではありません、私たちクリスチャンのことを言っているのではありません、旧約聖書の信徒たちのことでもないのです。特定の一人の人物のことを言っているのです。この「墓の穴を見せる」ということばは、別の訳し方をすると「腐る」と訳すことができます。皆さん、ラザロの話を覚えていますね。イエスがラザロの墓を訪れてラザロをよみがえらせるとき、イエスは「墓を開けなさい」と言いました。そのとき、そこにいた人たちは何と言ったでしょう？**「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」**と、それがここで言われていることです。「墓の穴を見せる」、つまり、ここでダビデが言っていることは、神の聖なる方というのは墓の中に納められて腐ってしまうことがないということです。これはダビデの神の約束に対する信頼のことばであり希望のことばです。ダビデは確かに、神が自分をよみに捨て置くことをせず、いつの日か、復活することを考えていたでしょう。けれども、この**「あなたの聖徒に墓の穴をお見せになりません」**ということばは、ダビデ自身の状況に適応するには余りにも強烈なことばなのです。なぜなら、ダビデ自身が「私は神の聖なる方」と呼ぶこと、「私は死んでも腐ることなくすぐによみがえってくる」などと言うのは、余りにも強いことばです。この文章に関して私たちにはすばらしい註解が与えられています。使徒の働きの中で、ペテロとパウロがこの意味を説明しているのです。使徒２：２５－３２**「ダビデはこの方について、こう言っています。『私はいつも、自分の目の前に主を見ていた。主は、私が動かされないように、私の右におられるからである。:26 それゆえ、私の心は楽しみ、私の舌は大いに喜んだ。さらに私の肉体も望みの中に安らう。:27 あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、あなたの聖者が朽ち果てるのをお許しにならないからである。:28 あなたは、私にいのちの道を知らせ、御顔を示して、私を喜びで満たしてくださる。』 :29 兄弟たち。先祖ダビデについては、私はあなたがたに、確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日まで私たちのところにあります。:30 彼は預言者でしたから、神が彼の子孫のひとりを彼の王位に着かせると誓って言われたことを知っていたのです。:31 それで後のことを予見して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない。』と語ったのです。:32 神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。」**、使徒１３：３４－３７**「神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちることのない方とされたことについては、『わたしはダビデに約束した聖なる確かな祝福を、あなたがたに与える。』というように言われていました。:35 ですから、ほかの所でこう言っておられます。『あなたは、あなたの聖者を朽ち果てるままにはしておかれない。』 :36 ダビデは、その生きていた時代において神のみこころに仕えて後、死んで先祖の仲間に加えられ、ついに朽ち果てました。:37 しかし、神がよみがえらせた方は、朽ちることがありませんでした。」**。この箇所はイエス・キリストのことを指しています。イエス・キリストの復活を預言しているのです。

ある牧師は、イエスが**「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」**（ルカ２３：４６）と言われたとき、この**「あなたの聖徒に墓の穴をお見せになりません」**ということばはイエスが思い巡らしていたことばだっ

た、「そう思う」と言われていましたが、私もこの箇所を学んでそうではないかなと思いました。イエスはよくご存じでした。たとえ十字架についても肉体は朽ちることがないことを、必ずすぐによみがえってくることを…。そのことをイエスは約束されていたし預言されていたのです。イエスも**「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」**と祈りました。残念ながら、杯は取り除かれませんでした。イエスは苦しみの中十字架にかかって死にました。では、十字架上でイエスの喜びも取り去られたのでしょうか？イエスは「あなたはわたしがこのように願ったのにそれを取り除いてくれませんでした。こんな苦しい状況の中にわたしには喜び楽しむ理由なんて何一つありません。」と神に言ったでしょうか？違いますね。ヘブル人への手紙の著者は１２：２－３で**「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。:3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。」**と言っています。イエスはよく分かっていました。神は神の聖なる者を捨て置かないことを。ダビデはどれぐらいこのことを理解していたのか私たちには知るよしはありませんが、彼は間違いなくひとつのことを分かっていました。神の約束は間違いなく成就するということです。ダビデは、たとえ、敵が私を討ち滅ぼすことがあっても、私がこの困難な状況の中で迎える最終的な到達点が、私が願うことからはるか彼方に離れていたとしても、神は最終的な勝利をもうすでにものにしておられるのだと分かっていたのです。今、私たちはそれを現実のものとして目の前に見ています。イエス・キリストが十字架にかかって死んだにもかかわらず、三日目によみがえって来られ死に勝利された、その勝利を私たちは知っているのです。私たちには勝利が約束されています。私たちの人生は死では終わらないのです。確かに一時的な困難を、もしかして皆さんは一時的とは思わないし、どうしてこんなに続くのかと、まるで永遠に続くかのように思うかもしれませんが、この地上における一時的困難というのは過ぎ去って行くものです。そして、たとえ、それがどれだけ私たちにこの真理を疑わせることをしたとしても、私たちは神が勝利したその勝利に目を向け続けなければいけないのです。ダビデは分かっていました。敵は私を滅ぼすかもしれない、でも、たとえ、私が滅んだとしても、私は主の前に栄え続けるのだと。死の内に私をとどめることをせず、事実、神はご自身の聖い方を墓の穴に見捨てられることはなかった、このことをよく分かっている敬虔な人物は、それ故にどの様な状況の中にあっても、落ち着きをもって喜びと満足に満ちた人生を送って行くのです。

ここまで私たちは、敬虔な人物というのが満足に満ちた人物であることを見てきました。喜びがあり、最終的な勝利が与えられているから、どの様な人生の状況の中にあっても、神の完全なご計画の故に神が愛をもって彼を導き、彼の人生を神の栄光のために用いてくださっているということを知っている故に喜んでいました。また、敬虔な人物は、あらゆる困難の中で最終的な勝利がもう与えられているということを知っている故に、苛立つことなく、いやな思いをすることなく、悲しみに打ちひしがれ落ち込んでしまうことなく、また、恐れることなくこの人生を歩んで行くことができるのだということを知っていました。でも、ダビデはそれだけでは終わらないのです。もうひとつ、満足する理由を教えています。

３．永遠の視点をもっているから

ダビデは１０節で記したように確かに死について考えていました。けれども、その死を目の前にした中にあって、ダビデの心は非常に興奮に満ちていたのです。１１節**「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。」**と、ダビデは分かっていました。この戦いは死で終わるかもしれない、この困難が私のいのちの終わりを告げるかもしれない、でもその中にあって、神は私にいのちの道を知らせてくださるのだと。ここで私たちが分かっておくべきことばは**「知らせて」**ということばです。これは単なる知識のことではありません。むしろ、これは経験のことを言っているのです。余りにも確かに知っている故に、それが自分の人生の中にはっきりと現われて行く、その姿を示しています。別な言い方をするなら、神はダビデに対してここで「わたしはあなたにいのちの道を示していますよ」という情報を提供しているのではなく、そのような理想を教えているのではなく、実際にダビデの人生において、彼が具体的に経験できる形で、いのちの道がダビデに示されていると言っています。この状況の中でダビデは、自分の肉体的ないのちが実際に助けられるという形でいのちの道を見つけました。ダビデはここで死ななかったのです。けれども、私たちがこのいのちの道が肉体的な道であると考えるのは、あまりにも狭い考え方です。この道がどこに続いているのかと言うと、神の御前へとつながっていたのです。このいのちの道というのは永遠のいのちの道です。ダビデが考えていたのは、肉体的ないのちのことではなく永遠のいのちのことです。そして、その道を神がダビデの人生に具体的に実践的な形で示してくださるということです。これはダビデがもっていた心からの希望の告白です。たとえ、彼が肉体的に滅んでしまったとしても、彼の人生は神の御前へと続き、永遠の祝福へと入って行くということです。

もしかすると皆さんは私に尋ねるかもしれません。いったい、神の御前にいることの何がそれほどにすばらしいのですか？と。ダビデはそのことを二つのことばをもって表わしています。１１節ｂ**「あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります」**と、そこには（１）喜びが満ちています、（２）そこには楽しみがとこしえにありますと。ヨハネは黙示録の中で、２１：３－４**「そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、:4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」**と語っています。天における最もすばらしいものは何でしょう？それは神です。天において私たちが最も喜ぶことは、光り輝くエルサレムを見ることでも、透き通った金の道を歩くことでも、私たちの愛して止まないもうすでに召された方たちと再び出会うことでもありません。また、私たちの苦しみが取り去られることでも、悲しみがなくなることでもありません。天においてもっともすばらしいことは、神とともにいることができるということです。神の似姿に造られた私たちが、完全に神の似姿へと変えられ、神のすばらしさを反映して、神が造ってくださった目的を圧倒的な形で成就して生きることこそが、私たちの何よりもすばらしい祝福なのです。皆さん、救いの喜びとは何だと思いますか？それは私たちが神の前に義と認められたことですと言われるかもしれません。罪赦され義と認められたことですと。義と認められて何が嬉しいのでしょう？神と同じようになってなんて私はすばらしいのでしょう？私たちが誇るためですか？違いますね。それとも私たちが神との和解を得たことですか？それが救いの喜びですか？それとも私たちが永遠のいのちを得ていることですか？

聖書は教えます。私たちが義と認められたことでも、和解を得たことでも、永遠のいのちを得ていることでもないと。では、それは何でしょう？救いの喜びとは、私たちがそれらすべてを通して神を喜び、楽しむことができることだと言うのです。ローマ５：１－２**「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」**、なぜ、義と認められたことがそれほどすばらしいのでしょう？なぜ、罪赦されたことがすばらしいのでしょう？神の栄光を待ち望むことができるようになったからです。待ち望んだ結果、私たちはその場にあって神の栄光を見、神の栄光を称えることができるようになるのです。５：１１**「そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。」**、義と認められることも和解を得ることもすばらしいことです。でも、それが終わりではないのです。その先があるのです。神があるのです。義と認められ、罪赦され、神と和解し、私たちが永遠のいのちを得ることによって、私たちは神を永遠に喜び、楽しむことができるのです。イエスはヨハネ１７：３で**「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」**と言われましたが、それができることが何よりの幸いなのです。ダビデはよく分かっていました。彼がそのすばらしい報いを神から受けることを。５－６節でそのことを告白していました。**「主は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。:6 測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。」**、神こそが私のゆずりの地所だと、この神の約束に対する確信があった故に、彼は満足を持って生きることができたのです。パウロはローマ８：１８で**「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」**と言っています。

ダビデは何を求めていたのでしょう？後にやってくる栄光です。Ⅱコリント４：１７には**「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。」**とありますが、神が後に与えてくださるすばらしい測り知れない永遠の栄光に比べたら、私たちが今出会っている様々な困難は余りにも軽いものなのです。続いて１８節**「私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」**、皆さん、神は間違いを犯すと思いますか？神は皆さんの人生を計画された時に、何か一つでも失敗があるような計画をしていると思いますか？神は皆さんが人生を生きている時に、しまった、それは気付かなかったと天で言われていると思いますか？神がそのような方でないことは私たちはよく知っています。神は完全に皆さんの人生をその詳細に至るまで計画しておられます。ご自身の栄光を現わすために、キリストを信じる皆さんの最善のために…。皆さん、これまでの人生で、今、後ろを振り返ってみて、「あー、あんな辛いことがあったけれど、でも、それを通してこんな良いことがあったのだ」と思うこと、「こんないやなことがあったけれど、それは私により神を分からせることだったし、神のすばらしさを知ることができたし、それを通してこんなにすばらしいみわざを為された」と気付くことがたくさんあったはずです。もし、「ある」と答える皆さんがおられるなら、どうぞ、皆さんご自身の最後を思い浮かべてください。神の御前に立って、これから永遠を迎えようとするその時、そこから後ろを、自分の人生を振り返って

見てください。皆さんは神の御前に立って、神の最善の計画を完全に理解して、それらすべてがどのように歴史の中で為されて行ったのかを見た時に、神の前に「神さま、あの時あなたはこうしておけばよかったのに…」と言うと思いますか？絶対にそんなことはありません。その時、私たちは言います。「あなたの計画はなんと完全で、すばらしく、私にとってなんとすばらしい祝福が与えられたのでしょう」と。ダビデはその視点からものを見ていたのです。

私たちが困難に立ち向かう時、何よりもしなければいけないことは天を見上げることです。天から私たちの人生を見ることです。この地上の事柄に目を向けていたら、私たちは決してそこから逃れることはできないでしょう。絶望するでしょう。悲しむし、痛みを覚え、落胆の中にあって「もう私は喜ぶことも楽しむことも、ましてや満足することなんて絶対できないでしょう」と言うでしょう。でも、もし皆さんが神の視点で、永遠の視点で自分の人生を見ることができるなら、そこには完全な満足があることを私たちは知ることができます。敬虔な人物はこのような、永遠な視点を持っていたのです。パウロは言います、神の前に仕えて行こうとする敬虔な人物というのは、必ず迫害を受けると。Ⅱテモテ３：１２**「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」**。神は私たちに苦しみのない人生を保証してはいません。むしろ、その反対です、苦しみに満ちた人生を保証しています。けれども、聖書は私たちに喜びに満たされることと、永遠の楽しみがあることを教えています、約束しています。それ故に私たちは、苦しみの中にあっても、好ましくない状況の中にあっても、測り知ることのできない永遠の栄光を見ながら、喜びに満ちて生きて行くことができるのです。

私にある先輩がいました。大学時代、神学校時代、同じ学舎で学んだ先輩です。彼の名前はバデイ・ストライドと言いました。彼は大学のキャンパスで警備員をしていましたが、今も私は彼がその警備服を着て大学内を巡回している姿を思い浮かべることができます。非常に聡明な青年で、すばらしい人物でした。彼は神学校を卒業した後、フィラデルフィアにおいて牧会の働きをするために越して行きました。彼は牧会の働きをしながら博士号を取るための学びを続けようとしていたのです。ある週の水曜日、その教会は彼と彼の親友であったドン・サンダースという二人の人物を、正牧師と副牧師として教会に招聘しました。二人は同じ町で生まれ育ち同じ高校に通い、同じ神学校に進み、同じ教会を導き牧する働きが与えられたのです。彼らは幼い時から語り合っていたそうです。いっしょに神のために仕え合って行こうと。彼らは小さな一つの家を共有していました。バデイーと奥さんと４人の子供たちは１階と２階の部分を、そしてドンと彼の奥さんは地下の部分を利用して住んでいたのです。彼らは同じ夢を見ていました。いつの日かフランスに行って、宣教師としてフランス人を訓練したい、彼らがみことばに立ってしっかりと働きを為して行くようにと、その目的に向かって夢に満ちあふれ、いよいよその学びが終わり、実践へと進んで行くその最中にあったのです。彼らにとってすべてが人生の中で最もすばらしい輝きに満ちていた瞬間ではなかったかと思います。彼らが招聘されたその週の金曜日、彼らが運転していた車が他の１台の車と衝突しました。家からわずか数百メートルしか離れていない所でした。そしてその場で、バデイとドンは天に召されて行きました。その召天記念式の時、その小さな教会は人であふれていました。その時、バデイの妻であってロイスは「私の夫は牧会者になることに情熱をもっていました。１２歳の時からそうなりたいと願って準備をし続けてきました。そして、この場にこうしていることは、まさに彼にとって夢かなうことでした。でも、彼は今私たちに『悲しいかもしれないけど幸せでいなさいよ、今この瞬間に幸福でありなさいよ』ときっと願っているでしょう。」と言い、ドンの妻は「夫がもしこの場にいたら『強くありなさい、確信を持ちなさい、真理にしっかりと立ちなさい』と、そう言ってくれるだろう」と言ったそうです。そして、ロイスは「私たちは二人をともに栄光へと召してくださった神に心から感謝しています。私たちがどれだけ彼らが私たちとともにいることを望んだとしても、神が二人をいっしょに天に召してくださったことというのは、まったく適切で、ふさわしく、神の最善のみわざです。」とも言ったのです。４人の子どもをかかえて希望に満ちた日々が、突然、夫を亡くすことによって取り去られてしまった女性が、その夫の死に関して語ったことばです。なぜ、このようなことが言えたと思いますか？私はこう思います。彼女は聖書的な喜びをもっていた、彼女は最終的にもたらされる完全な勝利を得ていた、彼女は永遠の視点をもっていたと。いっしょに乗っていたのはバデイの２歳の子どもでしたが、彼は幸いにしてけがをすることがありませんでした。新聞の記事によると、事故を起こしたその車の中で、バデイは死んでいるドンを抱え自ら息を引き取るその最中、救急隊がやって来るのを見て、２歳の息子に向かってこう言ったそうです。「あの人たちといっしょに行きなさい。パパはこれからイエスに会いに行くから」と。バデイの最後のことば、それは後悔のことばではありませんでした。それは苦しみのことばでも不安のことばでもありませんでした。また、落胆のことばでもありませんでした。彼の愛する２歳の子どもを見て、彼はこの子がどのようにしてこれから生きて行くのかと、心配に満たされたりしていませんでした。なぜなら、彼は神がその子や家族をしっかり養ってくださることを知っていたからです。その代わりに、彼の心はイエスの御前で、イエスを

称え、その御姿にお会いすることができる興奮で満たされていたのです。
　私はこのストライドさんご家族のことをそれ程詳しくは知りません。けれども、私はバデイが私の目の前を歩いていたのを見ていました。彼と私はことばを交わしました。そして、私の前で彼が生きたことを見ました。私がこの詩篇を学んでいったときに、特に、この最後の箇所を見た時に、どうしても彼の顔が頭から離れませんでした。彼はここでダビデが語った人生を生き、ダビデが語った死を死んでいったのです。皆さんご存じですか？ここに書かれてあることばは虚しい慰めのことばではないのです。大げさな励ましではないのです。ここに書かれてあることは真実です。そして、そこに書かれてあることを私たちは生きることができるのです。私たちは聖書的な喜びを持つことができます。私たちは最終的な勝利を得ることができます。私たちは永遠の視点から人生を見つめて、喜びと満足に満ちて生きることができるのです。私はこの詩篇を学んで、願わくはそのような生き方をしたいと思いました。
　皆さんが同じように思ってくださっていることを心から祈っています。